

戦地から届いた葉書についての一考察¹⁾

伊藤啓祐²⁾

Consideration of a Letter from Battle Front

Keisuke ITOH

Key Word : 葉書、戦時教育、日中戦争

1 はじめに

青森県立郷土館では、開館当初より近代史に関する調査研究を継続的に行っている。戦時中、多くの葉書が戦地と内地で行き来し従軍者および家族の心の支えになったことが知られている。特に学校教育のなかで生徒に従軍者への葉書を奨励していたが、その実例を考察した論文は少ない。本論では昨年について（伊藤、2015）、実例を上げて検証する。

県立郷土館に、2015年に青森市の寺谷ユキエ氏（以下人名敬称略）から戦時中に受け取った葉書16点が寄贈された（AOPM2353-1～16）。差出人は5名で、受け取った時期は昭和19年前後である。当時青森市大工町に住んでいた寺谷ユキエが国民学校初等科4年生の10歳の時である。伊藤（2015）では内地から戦地に届いた慰問文を取り扱ったが、本論では反対に戦地から当時の小学生に届いた葉書を考察する。

尚、本文中の人名はアルファベットで表記した。また、葉書の本文の旧字は新字に改め句点を付け加えた。送り仮名と誤字はそのまま掲載した。

青森県立郷土館に貴重な資料を寄贈いただき、また、当時の情報等についてご教示いただいた寺谷ユキエ氏、著作権等に関してご教示いただいた一般社団法人青森県発明協会、文化庁に対して心から感謝する。

2 S氏からの葉書

Sは寺谷ユキエの叔父にあたる。Sは両親が他界後、ユキエの両親に引き取られた。寺谷ユキエが2、3歳の物心がついた頃から同居しており、14歳前後の年の差はあったが、Sを兄のように「アンチャン」と慕っていた。Sは青森県立商業高校を卒業後に満州鉄道会社に就職、会社の上司に能力を認められ、士官学校に進学する。陸軍士官学校卒業後は軍人として活躍した。Sは昭和19年冬に出征し、昭和20年6月30日、フィリピンのレイテ島にて少尉の時に戦死している。出征前に最後になるかもしれないと弘前に出かけ、家族みんなで写真を撮った。また、寺谷ユキエによると『Sが青森市に帰ってきたときに新町の松木屋に連れて行ってもらった。松木屋に行く途中、Sと右手をつないでいたが、士官に会うたびに右手で敬礼し、下ろした手が幼い寺谷ユキエの頭につかるので、今度は左手をつないで歩こうとしたが、左手は軍刀をつかまなければならないので、手をつなぐことはできなかった。そこで後ろのベルトをつかんで一緒に歩いた』と語っていた。



図1. 昭和19年冬、写真館（弘前市）にて撮影
後ろ左がS、右が寺谷ユキエの両親、手前の女の子が寺谷ユキエ。抱いている人形は松木屋でSから買ってもらったものである。

Sからの葉書は全部で5通残っている。はじめはカタカナ書きの葉書（①、②）であり、時期は昭和16年頃、寺谷ユキエが小学一年生の頃に届いたものと考えられる。以下はその本文であり、消印がないので、掲載順は筆者が内容から前後関係を推測した順番である。

①絵葉書（満州牡丹江省より）

『アサバン、ダンダンサムクナツテキマシタ。ユキエモマイニチゲンキデ、ベンキョウシテキルコトオモヘマス。アンチャンモタイヘンゲンキデ、ベンキョウヲシテイマス。アンチャンニマケナイヤウニ、ユキエモヨクイフコトラキイテ、ベンキョウシナサイ。コンドカヘッターラ、マタタクサンオミヤゲヲカツテヤラウ。マツキヤガイイカ、ミツ

1) 青森県の近代史に関する調査研究 (2)

2) 青森県立郷土館 学芸主査 (〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

マガイイカ、ソレトモマンシュウノニンギョウサンガイイカ、ナンデモユキ枝ノスキナモノヲカツテヤル。ソレマデヨクベンキョウシナサイ。トウサンモカアサンモタツシャデセウ。ヨロシク。アンチャンハ、ゲンキナユキエノカホヲミタクナリマシタ。デハマタテガミヲカキマス。オヤスミナサイ。アンチャンニモテガミヲクダサイ。マツテキマス。 サヨウナラ』

②絵葉書（満州牡丹江省より）

『ソノゴゲンキデガツコウヘイッテキルコトオモヘマス。ヨクベンキョウシテオリマスカ。アンチャンモゲンキデ、マイニチオウマニノツテハシツタリ、ホンヲヨンダリシテキマス。アンチャンハユキエニマケナイヨウニベンキョウスルカラ、ユキエモアンチャンニマケナイヨウニ、ヨクイフコトヲキイテベンキョウシナサイ。ユキエハイマナニガホシイカ、ホシイモノガアツタラアンチャンニテガミヲカキナサイ。トウサンノテガミトイツシヨニ。ソレデハマタ、アトデテガミヲカキマス。サヨウナラ。 アンチャンヨリ ユキエへ。』

③葉書（満州東満総省より）

『ユキエよりのお葉書と写真が届きました。どれがユキエかというてもユキエは二百貫デブだからすぐにわかる。しかし元気なユキエの写真を見てとても兄さんは喜んでゐる。よくべんきょうし、そしてよく遊んで、立派な少国民になりなさい。もう二つ寝たらお正月。去年はユキエといつしよにお正月を迎えたが今年は出来ない。ごちそうがなくともいいお正月をすごしなさい。明日は兄さんも兵隊さんといつしよになって免狩と雉取りだ。澤山とお正月のごちそうにするんだ。だんだん寒くなる。風邪を引かないようにして、お友達となかよく遊びなさい。お父さん、お母さんも元気だろう。それから先生にもよろしく申し上げてください。 兄より 十二月三十日』

④絵葉書（満州牡丹江省より）

『お便り有難う。ユキエ初めみんな元気で居ることをきいて安心した。特にユキエはだんだん手紙の文も字も上手になってきたが、一生懸命勉強している証拠だ。受け持ちの畑井先生もユキエはよい子だと褒めていたがよく勉強していい子になれ。今度青森へ帰るときはもっともっとふとって二百貫デブになって居れ。来年は何年生か、兄さん頭が悪いから忘れタヨ サヨウナラ』

⑤絵葉書（満州牡丹江省より）

『ユキエ元気か。アンチャンはまた忘れた。何年生だったか。よく勉強をし、よく運動をするようにせよ。兄さんは今まで忙しいので、手紙を書かずに居った。ごめんごめん。満州もやっと緑の草が生えてきた。青森も暑くなつたろう。父さんも母さんも元気か。隣の富貴さんにもよろしくネ。よく先生のいふことをきいてしつかり勉強せよ。この前もらつた「なぞなぞ」はみえなくしたからもう一ぺんくれ。 ハイ サヨウナラ』

3 その他の葉書

Nは寺谷ユキエの家の向かいの煎餅屋の娘さんである。寺谷ユキエによると『煎餅が焼き上がった時に出来る余分な耳の部分を目当てによくお邪魔していた、ものがない時代ではごちそうだった』と話してくれた。Nは関東軍の酒保に勤務し、戦後は無事青森に帰還した。寄贈された葉書は全部で5通である。内容は季節の挨拶や中国での自然の風景、東奥日報で読んだネプタの記事などについてであった。

Uは寺谷ユキエの隣に居住しており、ビルマに出征している。近所つきあいはあったが、青森の空襲で離ればなれになってしまい、その後の所在は不明である。葉書は全部で3通残っている。Uは葉書に直筆でビルマの女性を描いてみたり、マンゴーがおいしい、日差しが強くて真っ黒けになったなど書いてあり、ユーモアのある内容が多く述べられている。

T及びIは満州へ出征していた兵士で、葉書は満州からである。この2名は一度、寺谷ユキエの国民学校を訪問しているが、寺谷とは全く面識がない。学校の指導で送った慰問文への返信が寄贈された。寺谷ユキエによると『学校の指導での慰問文は慰問袋に入れるためのものであり、年に1、2回書き、誰に届くかはわからなかった。書く内容についての指導はなかったので、なるべく兵隊さんが笑ってくれるような



図2. T氏からの葉書①裏面（武揚堂発行）
左吹き出し「コノ電気ノ大目玉ハ十里先デ新聞ガ読メルトヨ」
右吹き出し「コレデ照ラサレチャ敵機ノ夜襲モダイナシダ」
(APM2353-15)

文章を考えて書いた。』と語ってくれた。二人からの葉書の内容はよく勉強しなさいと書いた葉書が多いが、『初めて学校に行ったときはユキエさんたちは一年生だったね』と、学校訪問時の思い出も少し書いている。

これらの葉書はいずれも、日々のことが書いてあり、戦争の意気高揚のための内容や戦場そのものの内容は書かれていなかった。

4 考察

今回の調査において、実際に慰問文を送った経験のある寺谷ユキエから証言を聞くことが出来たのは大きな成果である。兵士の心を癒すような文章を書こうと思い葉書を送った小学生、武運長久を願うような文章を書く指導が少なくとも寺谷ユキエの学級ではされなかったことが新たにわかった。

葉書が送られたであろう1944年は戦争も末期となり、米軍のサイパン島上陸、神風特別攻撃隊が編成された年である。戦地にいた兵士たちの疲労感も幾ばくかのものがあつたと思う。寺谷ユキエに届いた戦地からの葉書は年に数枚程度ではあるが、冗談を書いたり（S氏の葉書③④）、きれいな絵を描いたり、具体的に個人名をだして子供を気遣ったりする様子から、内地に葉書を書く行為自体が、戦地に居た兵士たちの楽しみの一つではなかったのかと推察される。また、故郷の青森についての言及も多くあり、故郷に葉書を書く時間というのは兵士の過酷な環境下にあることを忘れ、素直に故郷を思う一個人になることが出来た時間だったと思われる。



図3. U氏からの葉書②裏面（武揚堂発行）
左吹き出し「写真屋サンウマク撮ッテクレ」中吹き出し「何時モ二人ハ救ケ合ッテ来タナァ…記念ニ一枚写真ヲ撮ッテ置コウヨ」右吹き出し「モウコレダケシカ無インダ半分ツツ吸ウトシヨウ」（AOPM2353-14）

5 おわりに

今回の寺谷ユキエ寄贈の資料と証言により、伊藤（2015）を補完するような内容を知ることができた。伊藤（2015）では戦地に届いた慰問文を大切に保管し、故郷に持ち帰ったY、本論では71年前に戦地から届いた葉書を大切に保管していた寺谷ユキエを紹介することが出来た。葉書を書くだけでなく、届いた葉書を大切に保管するその両者には人の気持ちを大切にするという共通の価値観があつたと思う。戦争末期はどうしても殺伐としたイメージで語られることが多い。本研究で実際にその時代に生きた国民の心の交流を見ることが出来た。兵士と子供の交流については今後とも継続して調査を行う予定である。

（引用文献）

伊藤啓祐（2015）満州に届いた慰問文 青森県立郷土館研究紀要、（39）；121-126